

# 深尾須磨子とコレット

松 田 孝 江

## はじめに

シドニー＝ガブリエル・コレット（1873-1954）が没してから半世紀以上が経った。フランスでは没後 50 年に当たる 2004 年、コレットをテーマにしたシンポジウムや書籍の出版が相次いだ。それらはいずれもコレットの世界に関心を寄せる者にとっては、新たなコレット発見につながる興味深いものである。ところで深尾須磨子は“コレットに私淑した”日本人として知られている。深尾はコレットをその自宅に“10 回ほど”訪問したと書いている。ここでは深尾が書き残したものの中にコレットの姿を追いながら、コレットがひとりの日本人女性に与えた影響を考察してみたい。

## 1. 二回の渡仏

深尾須磨子（1888-1974）は 86 年の生涯に 6 回海外に渡航しているが、コレットとの出会いが語られるのは、初回と第二回目の滞仏中のことである。初回は 1925（大正 14）年 3 月 16 日に神戸から箱根丸に乗船し、5 月 25 日にパリに到着、帰国したのは 1928（昭和 3）年春、丸三年の滞在であった。翌 1929 年 10 月のウォール街の株価暴落に端を発した世界恐慌は各国に波及し、1930 年 9 月、ドイツではナチス党が総選挙で大勝利を収め、国際情勢は悪化しつつあった。そんな中で、深尾は 1930（昭和 5）年 12 月 9 日前後に、毎日新聞特派員としてシベリア経由で再度フランスに出発、約 1 年半の滞在を終えて 1932（昭和 7）年 5 月に帰国したが、前回同様声楽家荻野綾子を伴っていた<sup>①</sup>。二度にわたる滞仏中の最大の収穫は、作家コレットとの出会いであった。最初の旅から帰ってつぎに出発するまでの間に、コレットの作品を二点翻訳出版している。『紫の恋』（1928 年、原題 *Chéri*；1954 年の改訳角川書店版では『黄昏の薔薇』と改題）と『犬猫の対話七つ』（1930 年；1955 年の改訳三笠書房版では『動物の対話』と改題）で、いずれも世界社から出されている。

## 2. フランス語事始め

深尾はどのような経緯でフランスに渡ることになったのだろうか。そこに至るまでの深尾の略歴をまとめておこう。のちの深尾須磨子である荻野しげのは 1888 年に兵庫県で二男五女の末子に生まれた。父親は武士の末裔で、政治に手を出したり緑茶の輸出を試みたりしたがいずれも成功せず、しげのが 5 歳のときに死去した。父亡きあと、しげのは 2 年ほど仙台に住む叔父の養女として辛酸をなめたが、離籍されて故郷に戻った。その後一時大阪で暮らし、11 歳で母親とともに、京都で教師をしていた長兄の家に身を寄せた。兄の勧めで京都師範学校に入学したが、すでに文学少女のきざしを見せていた強い個性は厳格な校風と合わず、本人の語るところによれば、「二年の二学期

が終わる頃、女学校に変わるようにと、ていよく退学処分を受けた」<sup>(2)</sup>。そこで京都の菊花高等女学校の3年に編入し、卒業後検定試験によって教員免状を得た。20歳を過ぎて、京都の三高在学中の深尾賛之丞（ひろのすけ）と親しくなり、1912年4月に京都帝国大学2年の深尾賛之丞と学生結婚した。20代前半に約2年間京都で小学校の教員をしていたが、その正確な時期は明らかになっていない。

結婚直前のできごとに興味深いことがある。1911年11月30日に故郷の村の山内家の養女となり、12月に山内しげのから山内須磨子と改名、翌年1月22日に山内家より離籍したときには、荻野須磨子になっていた。この養子縁組は、改名のための裏技だった。一家に同じ名前の者が二人いるとまぎらわしいので改名が許されるという法律に目をつけ、自分と同じ名前の娘がいる家に入籍させてもらって同居し、目的を遂げるとただちに離籍したのである<sup>(3)</sup>。ちなみに、京都師範学校時代からその詩に親しみ、やがて生涯の師となる与謝野晶子について、深尾は昭和43年、80歳の時に師の伝記を執筆しているが、巻末に添えられた年譜には「本名志よう、晶子は筆名なり」とある<sup>(4)</sup>。深尾自身は、早い時期に本名と筆名を一致させることに成功したといえようか。機械工学を専攻した夫は鉄道省に勤めたが、1920（大正9）年の夏に30代半ばで病死し、須磨子は32歳で寡婦になった。須磨子の夫は技師でありながら、ヨーロッパ志向の強い詩人だった。1918（大正7）年に東京日々新聞（現毎日新聞）に長詩「壁に描きて」を投稿したが、これは森鷗外、与謝野晶子らの審査を経て第一席に輝いた。夫の足跡を残しておきたい思いで晶子のもとをたずねた須磨子の願いは、森鷗外序文、与謝野晶子あとがきの遺稿詩集『天の鍵』（1921年）の出版という形で実を結んだ。『天の鍵』には晶子の勧めもあり、「付録」として須磨子の詩54編と散文1編も収められ、これが須磨子の処女作となった。深尾はその後文芸誌『明星』の第二期に参加し、詩人として歩み始めた。深尾の師となる晶子は1912年から半年ほどフランスに遊んだことがあったが、深尾もやがてフランス語を学び始める。1922（大正11）年頃から明治大学のフランス語教室で田付たつ子について初歩から始めたフランス語の勉強は2年余り続いた。田付たつ子は外交官の娘で、生後まもなくパリに行き、16～17歳までフランスで教育を受け、来日したデュアメルをして、「田付たつ子のように正しいフランス語を話すものは本国フランスでさえ珍しい」といわしめたほどのフランス語の達人だった<sup>(5)</sup>。深尾はその後フランスに旅立つが、その頃の心境をつぎのように記している<sup>(6)</sup>。

良人と死別の後、残された遺産の小ガネをたよりに、英仏語の学習や詩作生活を送りつつも、ことごとに、自ら小ガネ持の寡婦の立場にこだわり、ついには、他人を見る自分の目と、自分を見る他人の目のどちらもが、小ガネのために曇っているのではないか、という疑問にさえとりつかれたわたしであった。小ガネ持の生臭い寡婦を自分自身に当てはめてみて、わたしはぞっとした。大金持ちならほんの小づかいせんにも等しい小ガネ、しかも若い良人に残されたそれを有効に生かすには、それをつかって独立独歩の生活力をつけるのが急務であると、晶子に指示された方向の詩道精神をめざし、ひっそり船で神戸を出発したのは、たしか大正十四年春のことであった。

「残された遺産の小ガネ」「大金持ちならほんの小づかいせんにも等しい小ガネ」について、逆井尚子氏が伝える内容は、改名のときのいきさつとともに興味深い。須磨子の夫は岐阜県山県郡の代々続いた名家に生まれ、5歳で父に死なれたものの、家門を継ぐ“若殿様”だった。夫の死後、須磨子は一族の反目をよそに、遺言によって相続した広大な土地を売り払い、今日ならば何億にものぼ

る富を手に入れたという<sup>(7)</sup>。大正末期から昭和初期に友人を伴い、二度の長期滞仏を可能にしたのは、そうした“小ガネ”であった。

### 3. コレットとの出会い

深尾が初めてコレットの姿を見たのはガヴォー・ホールでの演奏会で、コレットはソプラノ歌手のマダム・ガブリエル・ジルと共に、動物をテーマに自作自演のモノローグを演じたという。しかし実際に深尾がコレットの私邸を訪問したのは、1926年5月のことであった。その時のことを振り返って深尾はつぎのように書いている<sup>(8)</sup>。

時は五月、並樹街のシュセの通りには、ところどころ生垣のリラがむらさきに枝垂れていた。パリでもこのあたりは特にシックな住宅地である。私を運んだタクシーが、瀟洒なビラの前でとまった。出迎えの庭番風の男に案内されて私はコレットのサロンにとおされた。サロンとはいっても簡素なものでよけいな装飾は一つもなく、アカジューの卓上におかれた大きな花がめに、見事なうすむらさきのテュリップが数十本投げ入れられているだけであった。

開け放った窓からゆたかに見えるパリの空や、ブローニュの森などで、あたりの明るさは屋外を錯覚させるほどだった。やがて女主人公コレットがあらわれた。今を去る約二十七、八年前のことだから、彼女は五十をずっと出ていたはずだけれど、まだ十分に美しかった。という以上に、いっそ年齢不明の美女、とでもいった方がしっくりするのも知れない。

美しい褐色の髪をサロメふうになら立て、いったいに茶系統のいでたちで私の前にあらわれたコレットのシルエットに、私はほんとにサロメを幻想せずにはいられなかった。

挨拶もそこそこで、彼女は私を裏庭に案内した。そこは、彼女がお得意の土いじりのために当てられている菜園で、サラダ類がみずみずしく繁り、一隅にはサフランや薄荷などの葉草類が栽培されていた。彼女は得意満面でそれをいちいち私に説明しながら、頭痛のするときには、薄荷の葉を熱湯に入れて飲むと効果がある、などと言った。そして、女中を呼んで菜園のかたわらにお茶の支度を命じた。

五月の微風と光の中で、土の香の中で、そして薄荷の匂いにむせびながら、他ならぬコレットと飲んだお茶の味、私はあの瞬間をいつまでも忘れることができない。

シュセの邸宅には日本人、アメリカ人、ギリシャ人たちがひっきりなしに出入りした。身なりも上から下まで、作家、画家、音楽家、なかにはサインをもらいに来ただけという人まで押しかけた。コレットは選り好みせず、そうした人間模様を楽しんでいるようだったという<sup>(9)</sup>。松尾邦乃助は『フランス放浪記』（1947年、鱒書房）に、1920年代半ばのパリには、日本人が1,000人近くいて、そのうち200人余りは画家だったと書いているが、深尾の記録はコレットに直接会った日本人の観察として貴重である<sup>(10)</sup>。深尾によれば、『動物の対話』や『コレットの家』『ミュージックホールの楽屋』その他を読んで魂を奪われ、最大傑作『黄昏の薔薇』（原題 *Chéri*）の邦訳を進めている最中の訪問だった。深尾は初めてのコレット訪問について、さらにつぎのように語っている<sup>(11)</sup>。

初めて迎えた異邦人の私を、彼女は心からもてなし、裏庭に栽培したハッカやサフランなど葉草畑のかたわらにテーブルを移しカフェをすすめながら、詩の研究もけっこうだが、その一方でぜひとも短編小説を書くようにと、熱心に繰り返すのだった。自分の願いは、より完全な

短編を書くことだ。短編の核心をつかむことは非常にむずかしいが、詩人なら可能である。まずモーパッサンの純正コントをよくよく読むことだ。モーパッサンは全く短編の神とでもいいたいほど完璧なものを書いている。虚実綯いませる純正コント、すなわち短編の要領を、モーパッサンほど生かしている者は他にはない。読み返せば必ず得るところがあると思う。と語るコレットの言葉には熱がこもり、何か書けたらフランス語になおして見せてごらん、とまでいうのだった。

そのようなコレットが私はただありがたく、彼女の熱意をそのままに受け入れて、ぜひとも何かを書かなければと思った。その一方「コレットの本領は長編小説ではなく短編である。彼女の書いている長いものも、よく読むと幾つかの短編を、彼女独特の段落でつないだ、ユニークないき方をねらったものである」と評家の誰かの言葉も頭に浮び、短編に打込むコレットの熱意の出所にふれる気持ちにもなった。ともあれ最初のコレット訪問は、十年の間、詩道一路をたどり、詩に凝りかたまつた私の前に、より広く、より複雑な、短編の散歩道が開ける機縁となったことを、銘記しておきたい。

コレットが言及しているモーパッサン（1850-1893）は、母親の幼な友だちであるフロベールを文学上の師と仰いだが、その交友はモーパッサンが自作の詩をフロベールに批評してもらうことから始まり、やがてモーパッサンは短編の名手と言われるようになっていく。コレット自身、出世作となった『シェリ』（1920）のような長編小説以外に、深尾も言及するように、短編も多く残している。コレットと邂逅後の深尾は、詩歌の分野をこえて散文の領域にも創作活動を広げることになる。深尾を迎えた当時コレットは53歳——37歳だった深尾より16歳年長、ちなみにコレットが生まれる2年前にブルーストが、1年後に樋口一葉が誕生している——になっていたが、人生の曲がり角に差ししかかっていた。前年に2度目の夫と正式に離婚、その直後、サントロペで3番目の夫となるモーリス・グドケと出会って行動を共にするようになっていた。コレットの中で何かがふっきれ、新しい生活が始まっていたのだ。彼女は、物書き、自分の作品に出演する女優、講演会の人気講師、グドケのパートナー、ひとり娘を持つ母親と多忙だった。深尾と会った1926年のスケジュールを伝記作家たちの証言から列挙すると以下ようになる。

- 1月10日～29日 『シェリ』の地方巡業公演
- 2月22日～3月13日 『シェリ』のパリ公演
- 3月 『シェリの最後』出版、好評
- 4月7日～5月10日 グドケとモロッコ旅行
- 7月初旬 サントロペに別荘購入、家の手入れに没頭
- 9月初め 『シェリ』のボルドー公演
- 10月 1年間の英国留学から帰国した娘をベルサイユの寄宿学校に入れる
- 11月3日～9日 ブリュッセルで『さすらいの女』公演
- 11月 シュセ通りのすまいからパレ＝ロワイヤルの中二階へ転居
- 11月29日～12月7日 スイス六都市で「ミュージックホールの内幕」と題し講演
- 12月 南仏五都市で『さすらいの女』公演

上記スケジュールでみると、深尾がコレットをたずねたのは、コレットがモロッコ旅行から帰国した頃に当たる。コレットは夫がいようがいまいが生涯自立した女性だったが、離婚直後のこの時期には出費もかさみ、大車輪で働いていたことがわかる。

深尾が初めてコレットに会ってから半年後の1926年11月、コレットはシュセ通りの家を出て、

パレ＝ロワイヤルの中二階に引越した。前夫が売却したシュセの屋敷について、コレットは深尾に  
つぎのように語ったという<sup>(12)</sup>。

旧居シュセのビラは、その後たちまち成金ふうになった。コレット丹精の菜園や薬草畑もセ  
メントで平らにされ、そこいら中に石像まがいのものが立って、あたりはしろじろとした石が  
ちの風景になってしまった、と、これは後日コレットからきかされた述懐である。

17世紀に一時幼いルイ14世のすまいだったことに名前の由来があるパレ＝ロワイヤルはパリの  
中心部に位置し、深尾が短編「馬來の血の流れている男」の中で、コレットとおぼしき人物に言わ  
せているように、19世紀前半まで付近一帯は娼婦たちの溜まり場だった。深尾はこのパレ＝ロワ  
イヤルにもコレットをたずね、訪問は前後10回ほどに及んだと記している。パレ＝ロワイヤルで  
は、南側の庭園に面した半月形の窓は、張り出しアーケードにさえぎられて陽光を通さず、天井は  
低く、昼夜電灯を点さなければならない長方形のこの部屋を、コレットはトンネルと呼んでいた。  
この部屋を訪問したときの様子を深尾はつぎのように述べている<sup>(12)</sup>。

あのアルケードの階上部屋へも、思えばよくも通ったものである。私がいくと、彼女は私に  
帽子を脱がせ、髪の色が自分たちに近い、といい、また、目も猫のようではない、などといっ  
た。要するに、彼女が観念的に想像していた日本人というものに、私があまり似ていないこと  
を、彼女は不思議に、そしていささか不満にも思ったのだろう。

コレット訪問も度重なる中には、女中のポリヌとも心安くなり、時には彼女の不在中にも  
そのサロンへ通されるようなこともあった。そんなとき、彼女の安楽椅子の上には、きまって  
彼女の代わりに犬と猫とがひかえていた。

#### 4. 「コレット点描」が伝えるコレット像

深尾の散文集『丹後の牧歌』（1940年）には、「コレット点描」と題された作品があり、後年こ  
れは『深尾須磨子選集《随想編》』pp. 67-84に再録された。

深尾はコレットという名前のもつ音のひびきについてつぎのように書く<sup>(13)</sup>。

これほどの彼女の名声のよってくるところは、いわずと知れた彼女の偉大さにあるのだが、  
それと共に彼女の名のコレット、いかにも口から口にはやされるのに格好なような、この簡単  
で歯切れのよいそれもあずかって大いに力があるように筆者には考えられる。姓名判断の権威  
（？）山田耕筈氏あたりにお伺いを立てても、必ず上々吉と仰せられるだろう。

名前というと「しげの」を「須磨子」に改名した折の強引さが思い出される。フルートを奏で  
る詩人としての深尾は、名前のひびきの喚起力に敏感だった。われわれのコレットは、「コレット・  
ウィリー」の時期を除き、父親の姓である「コレット」以外のペンネームを持たなかった。Henri  
de Jouvenel との間に娘が生まれたとき、大作家コレットは、自分のファミリーネームをファース  
トネームとして娘に与えた。Colette de Jouvenel となった娘は、偉大な母の名を引き継いだこと  
を生涯重荷に感じていたようである。

またつぎは、深尾がコレットの講演を聴きに行ったときの感想を述べたくだりである<sup>(14)</sup>。



ちなみに、彼女の講演は実に手にいったものだ。パリでもしばしばやるが、筆者がモンマルトルのテアトル・ドゥザアヌできいた「ミュージックホールのシャンソンの歴史」などは、彼女自身が七、八年間もミュージックホールに席をおいていただけあって、身ぶり手ぶりで歌いながらというあくの抜け方で満場をうならせた。

伝記によればコレットは1930年12月11日に、Théâtre des Deux-Ânesで「ミュージックホールでのシャンソン」と銘打って講演をした。ところが講演直後に体調を崩してしまい、年末から翌年1月5日までサントロペで静養に努めた。しかし、当時ミュージックホール出版協会の名誉会長に選出されたばかりであったコレットは、協会の財政に寄与するために1月22日に再度講演会を開催したという<sup>(15)</sup>。深尾は12月の講演会が開催された頃、再びフランスに旅立とうとしていた。したがって翌年1月の講演を聴いたものと思われる。それはよほど印象深かったらしく、深尾は別のところで以下のようにさらに詳しく語っている<sup>(16)</sup>。

二度目のパリで(1931)私がコレットの講演をきいたのは、モンマルトルの、小劇場テアトル・ドゥーザーヌにおいてだった。前以て切符をとっておいたからよかったものの、時間を気にしながらタクシーでかけつけると、既に満員客どめ、場内にぎっしり詰った客は、いずれ劣らぬ熱心なコレットのファンで、パリでもえりぬきの紳士淑女ぞろいだった。

フランスにおけるミュージック・ホールと、シャンソンの歴史を語ったその日のコレットのいでたちは、見るからにすっきりとした黒と白の配色で、胸に結んだ雪白のジャボがまぶしかった。16世紀、17世紀と話に区切りがつくたびに、シャンソンの名歌手マリデュバが、その時代の代表的なシャンソンを歌い、そしてまたコレットの話がつづく、といった次第で、舞台も客席も一つになって白熱化したあげく、ばらや堇の花束が投げられ、コレットがそれを拾って口づけながら、アルフレッド・ド・ミュッセの詩を暗誦する、といった光景、まことにパリならでは、の豪華な雰囲気であった。

ことばを紡ぐ文学者コレットがシャンソンの歴史を語り、ロマン派の巨匠ミュッセの詩を朗読する姿とその演出方法は、深尾の脳裏に深く刻み込まれたことだろう。1971年6月に東京文化会館小ホールで開催された「伊藤京子リサイタル」では、深尾が1945年に発表した組詩「祖師谷より」に山田一雄が曲をつけた組曲「祖師谷より」が歌われたが、逆井尚子はこれについて以下のような“忘れがたい”エピソードを紹介している<sup>(17)</sup>。

それはこのコンサート開催の何日か前に、須磨子が私に伊藤京子宅への電話を所望した出来事にはじまる。うたい終わったとき、舞台の上に自分を上げらせることを伝えてほしいというのだ。抱き合って抑えきれない感動を披瀝する須磨子の大仰な身ぶりが、その夜の観客の喝采を博したことは言うまでもない。

パリっ子のうわさ話を引用する形で始まる「コレット点描」は、これまでみてきたように深尾自身の体験談や感想も含まれるが、コレットの日常生活や趣味趣向が詳しく紹介されていて、そのすべてが「前後10回ほどの訪問」から得られた情報とは考えにくい。事実、深尾自身もこの作品の中で言及している、クロード・ショヴィエール Claude Chauvière (1897-1939) によるコレットの伝記 *Colette* (1931, Firmin-Didot, Paris) からの訳出・引用が随所に見られる。ショヴィエール (193)

は新進の女性作家であったが、コレットの信頼を得て、1928年から1931年までの3年間、秘書としてコレットの傍らで生活することを許された。コレットの3番目の夫モーリス・グドケが書いた回想録は、コレットを美化している嫌いがあるとする見方もあるなかで、ショヴィエールの『コレット』は、作家との距離の取り方もよく、信頼できる内容とされ、後年多くの伝記作家たちに引用されている。現在入手が困難なこの本は、日本近代文学館の深尾須磨子文庫に含まれていて、それをひもといてみると、深尾が「コレット点描」を書くに当たって参照した痕跡が残されていて興味深い。深尾は1931年に出版されたこの本をパリでさっそく買い求めたにちがいない。たとえば、以下はショヴィエールの『コレット』pp.1-2からの訳である。

—— ああ咽喉がかわいた。といったかと思えば、彼女はすぐにまた、ああひもじい、と叫ぶ。彼女の生物の感覚は、何にもまして飢えとかかわきに敏感だ。「……」

その間には、彼女のわが儘ざんまいをさらけ出す若干の時がある。そんな時、彼女はきまって林檎をかじり、チョコレート菓子を頬ばりながらいつののける。

—— ポオリヌ、わたしゃ病気になるほどひもじいんだよ。「……」

ところで彼女がいかに飢餓をうったえようとも、飼い犬や飼い猫の食物の仕度に夢中になっているポオリヌの耳にははいらぬ。そうですか、ともいわない。そこでコレットは手持ちぶさたに夏冬ぶっとおしに燃やすのを常としている炉のあんばいを見る<sup>(18)</sup>。

つぎもショヴィエールの『コレット』p.10とp.14からの訳である。

彼女の家中はいつも花だらけである。時どき、いなか風コレットの声が充満した花の匂いをゆすぶる。はっきりと特長のあるコレットの声、それはつまりまぎれもないフランスの声なのかもしれない。

小石がちの小川のせせらぎのような、泡の勝った水車のきしみのような、またジャズのような、アンジェラスの鐘の音のようなその声は、一度耳にしたが最後決して忘れることが出来ない<sup>(19)</sup>。

女中のポリヌとコレットとのやりとりはショヴィエールの伝記の冒頭を飾る部分であり、後年何度も引用されることになるが、深尾がその先鞭をつけたのではなかろうか。また、コレットのブルゴーニュなまりの語り口は有名で、晩年の肉声は今でもCDで聞くことができる。しかし、時として深尾の筆は、思い込みのためにあらぬ方に向かってしまうこともある。「コレット点描」をしめくくる、コレットから娘に宛てられた手紙の解釈がそのひとつである。娘コレットは母からもらったかなりの量の手紙をショヴィエールに資料として提供した。ショヴィエールはそのうちのいくつかを紹介しているが、そのなかの一通について、深尾はつぎのように書いた後、実際に手紙の訳文を載せている<sup>(20)</sup>。

最後に、母としてのコレットの一端を知るに格好な、彼女のひとり娘にあてた手紙の一節を追加してこの稿を終ることにする。

彼女が、かわいさのあまりにいわゆる親だわけをさえさらし出して省みぬ当のひとり娘はすでに再三述べたとおり、二度目の夫政治家アンリイ・ド・ジュブネルとの間に出来たもので離別後父祖のもとで育てられて今日になっている。そうした事情から、自然母と子との間には何

かというにいわれぬ気苦勞が絶えぬらしい。この手紙にはその間の消息が手にとるようにうかがわれる。

深尾はコレットを、娘と離ればなれに暮らすことを余儀なくされた、せつない母親とみていたらしい。コレット 40 歳のときに生まれた娘（愛称ベル・ガズー、コレットは娘のことをコレット 2 世とも呼んだ）は、コレットにとってかけがえのない存在だったことは確かだ。しかし生まれてからは、イギリス人の乳母をつけて父親の故郷で生活させ、学齡期になるとパリの寄宿学校に入れ、夫と離婚した時 12 歳になっていた娘には、「もう大きいんだから自立しなさい」と 1 年間イギリスに送り、帰国後はまた別の寄宿学校に入れる。ヴァカンスになると、コレット 2 世は別々に暮らす父と母の間を行ったり来たりという状態で、「わたしユダヤ人になりたい、ユダヤ人のお友だちには、みんなちゃんとしたうちがあるから」と言い出す始末。反抗期の娘が寄宿学校でタバコを吸ったり、友人といさかいを起こしたりしたときは、さすがに母親らしく娘を諭したが、接し方は厳しかった。けれどもまめに手紙を書くことが生活の一部だったコレットは、離れて暮らす娘にもせっせと手紙を書き、娘からの手紙も楽しみにしていた。前述の手紙には、夏休みにサントロペにやってきた娘が、父親のところへ旅立ったあと 1 か月以上も手紙をよこさないことにいら立っている様子がうかがえる。コレットは娘に対して、「まだ年も 15 だし、親子なんだから上手に書いてやろうなんて思う必要はないの。気楽に書けばいいのよ。」と励ます。しかし深尾はそこに、あくまでせつない親心を読み取ろうとする。ところでショヴィエールが取り上げたこの手紙は、コレットの『娘への手紙』*Lettres à sa fille (1916-1953)* (2003, Gallimard) pp. 193-194 に、1928 年 9 月付けのものとして採録されている。それを見ると、ショヴィエールは手紙の前半のみを採用して後半は割愛したことがわかる。深尾は日本語に移すとき、ショヴィエールが引用した部分のうち後半を削った。その結果、訳出されたものは手紙全体でみると、最初の出だしの部分だけになってしまった。しかし深尾は、手紙がそこで終わっているという体裁にしたかったらしく、原文にはない結びのこたばを少し付け足すという工夫も加えている。なお、その訳文の一部は、『与謝野晶子』(pp. 179-180) にも引用されているが、そこでも深尾はコレットに、幼い娘をひとり婚家においてきたせつない母のイメージを重ねている。

## 5. モーリス・グドケとコレット

グドケとコレットが出会ったのは 1925 年南仏サントロペで、当時コレットは 52 歳、グドケは 36 歳で、グドケには親密な女性がいなかったわけではないが、公式には独身だった。グドケはオランダ人の父とフランス人の母のもとパリに生まれた。ユダヤの家系で、宝石仲買人だった父の仕事の関係で、子供時代をアムステルダムで過ごしたが、やがてフランスに戻り、ジャン・コクトーと同じリセ・コンドルセで学び、二人は同級生だった。グドケは父と同じ宝石仲買の仕事をしていた。実務家である一方読書家で、詩集を出すほど文学好きな面もあった。コレットは離婚したばかりだったが、二人は正式な結婚手続きをする必要を感じないまま 10 年が経った。しかし 1935 年に招かれてアメリカに渡航することになった。船中や滞在先のホテルで同室をとるには、正式な夫婦になっていた方がよからうというのが二人が出した結論で、出発前に急遽結婚したのだった<sup>(21)</sup>。深尾が描くグドケとコレットの関係は、こうした事実とはかけ離れている。以下の引用文は、詩集『パリ横丁』(1959 年、平凡社) 所収で、後年『深尾須磨子選集《随想編》』(p. 238) に再録された、「詩人の家」と題したエッセイの一部である。



コレットが、かなり年齢にひらきのあるグドゥケと結婚した事実の裏に、彼女の熱烈な人類愛が秘められていると聞かされたのは、私にとって初耳だった。元来ユダヤ人であるグドゥケが、世界に有名なヒトラーのユダヤ人狩りのとぼっちを受けて、その身辺が危うくなったとき、それを知ったコレットが、グドゥケを自分の良人にして、彼の命を救った、というのである。コレットがフランス最高のアカデミー・ゴンクール会の会長に選ばれたのは、その偉大な、また無比無類の文業と才能によることはいまでもないが、右のような、身をもってした彼女の人類愛が、ほかならぬフランス人の倫理に触れ、彼女の名声にいつその光輝をそえたのもたしかである、と、フランス語の先生モーブラン夫人も話した。

また『与謝野晶子』(1968, p. 117) では、以下のように“人道主義者コレット”のトーンがさらに高まりを見せている。

彼女はまた、ユダヤ人（ユダヤ人）に対するヒトラーの残虐行為に抵抗、当時生命の危険にさらされていたメキシコ系ユダヤ人の若い男を、形式上の良人として自分の籍に入れ、コレットの良人を殺すなら殺してみよ、とヒトラー一派に立向った。

日本近代文学館所蔵の深尾須磨子文庫には、モーリス・グドケ著『コレットのかたわらで』*Près de Colette* (1956, Flammarion) が含まれている。これはコレットの死の2年後に出版され、コレットとの出会いから始まってコレットが亡くなるまで、共に暮らした30年間をグドケが綴った回想録である。そこには、1941年末から翌年2月にかけてのコンピエーニュでの収容所生活も語られている。グドケの回想録を読めば明らかであるが、コレットが好きになった相手がたまたまユダヤ人であったわけで、結婚とユダヤ人との間に因果関係はない。深尾の記述は、深尾自身がこうしたいきさつを知った上で、コレットを理想的な人道主義者に仕立てるためになされた脚色と思わざるをえない<sup>(22)</sup>。

## 6. コレットが描く日本人像

『子供と魔法』*L'Enfant et les Sortilèges* はコレットが1913年に求められて書きおろしたオペラコミックの小品であるが、作曲を依頼されたラベルの仕事がはかどらず、1925年3月にやっとモンテカルロで初演の運びとなった。これを観た後パリに戻るコレットを、グドケが車でパリまで送ったことから、二人の間に愛が芽生えたのだった。モンテカルロの公演は成功裏に終わり、翌1926年2月1日からパリ公演がオペラコミック座で始まった。物語は、生意気ざかりの男の子が、突然母親に反抗して、そばにいたリスや猫に当たりちらし、食器類を投げつけてうさはらす。すると手荒く扱われた品々が共に反撃に出る。急須と湯のみが東洋のことばで話し始め、破り捨てられた絵本からは、主人公の王女さまが出てきて子供をいさめる、という展開だった。コレットは娘にあてた手紙で、「週二回の公演は大入りだけど波乱含み。ラベルの曲は、斬新さを買う側と反対派に分裂。猫が鳴き交う場面になると騒然となる」と書いている<sup>(23)</sup>。深尾は「東洋風」とタイトルをつけた短文で、急須と湯のみが語る場面について、つぎのように評している<sup>(24)</sup>。

プランタンという大百貨店に、日本風の品物がならべてある。屏風、提灯、傘、きもの、半被、陶器、と、何しろ東洋ぶり大流行のこの頃とて、なかなか凝るには凝ったものだが、中に

は支那風と日本風とをごちゃまぜにしたドイツ製らしいまがい物もあり、その多くは感心ができない。ことにフランス製らしい花がめに、日本字で「消毒割箸」と焼付けたのなどは、あまり何でもひど過ぎる。

「サオオラ、サオオラ、ハラキリ、ハヤカハセツシウ、ハハハ、ハラキリ」これは、わたしのことに私淑してやまぬコレットが、「ランファン・エ・レ・ソルティレイジュ」（ラヴェル曲）の中で、支那の茶碗に歌わせた一節だが、西が東を理解することも、また至難といわねばならない。

深尾は1926年2月、パリのオペラコミック座の観客のひとりだったのだろう。これを契機に深尾の心のなかには、敬愛するコレットも、日本についての知識は、ハラキリ、ハヤカワセツシウ程度という思いが定着していく。ここでコレットがオペラコミックに登場させた早川雪洲（1889-1973）とは、千葉県に生まれて20歳で渡米し、サイレント初期のアメリカ映画に出演して一躍人気スターになった人物である。トーキー以後は性格俳優として『戦場にかける橋』（1957）での名演技が知られているが、1920年代から30年代に三本のフランス映画に出演している。『ラ・パタイユ』（1923）、『犠牲』（1924）、『ヨシワラ』（1937）である。1925年から10年間パリで暮らした石黒敬七（1897-1974）は、随想集『蚤の市』（岡倉書房、1935）でパリを描いたが、それによると、石黒がパリに着いた1925年当時は早川雪洲がフランスで人気の絶頂にあった頃で、シャンゼリゼの一流ホテルで妻と豪勢な生活をしていたという<sup>(25)</sup>。1914年から「ル・マタン」紙やいくつかの雑誌に映画時評を書き始めたコレットは、アメリカ映画『タイフーン』（1914）や『チート』（1915）における早川雪洲の演技に注目している<sup>(26)</sup>。

深尾はコレットが初対面の頃、帽子をとらせてしげしげと自分を観察し、やや不満気に日本人らしくないともらした様子を題材にして、「馬來の血の流れている男」という短編を書いている。パレ＝ロワイヤルの大庭園に面したアパルトマンに住む作家マダム・ローランのもとに、日本人のフランス文学研究者真木子が教えを請いに通ってくる<sup>(27)</sup>。

—今日は、マダム、またお邪魔にまいりました。

いつものように、そんなあいさつをして部屋にはいってゆく真木子に、ローランは例の調子で、率直に浴せかけた。

—ね、私みたいな変人のとこへ、お参りのようにやってくるのは、よくよくの物好きだよ。ああ、ああ……。

いったかと思うと、彼女は急に声を落として、付け加えるのである。

—短編の勉強はどう。短編を書かなくちゃだめだよ。詩人の領分だからね。

例によって例のようなローラン式を、真木子はまたいつものとおり恐縮いっぱいの態度で受けるより外仕方がなかった。

ある日そこで遭遇した新聞記者マルセル・ルボンにマダム・ローランは真木子を紹介する。珍しい日本の婦人マキコ・アキバ。でも不思議、目も猫のようじゃないし、皮膚も真っ白、髪の毛も茶褐色でまるでわれわれと変わらない、と。マルセル・ルボンの反応は、まるで品物扱いして失礼千万、一体にフランス人は支那も日本もごっちゃにして恥知らずな評価をしようとする、とローランを非難する。お詳しいあなたは印度人それとも支那人？ とローランに切り返されたルボンは、僕には馬來人（マレー人）の血が流れているんだと煙にまく結末になっている。

## 7. 「サボテンの花」

深尾の短編小説「サボテンの花」(『マダム・Xの春』pp. 73-85 所収)は、コレットの『夜明け』(1828年)の冒頭に使われている、サボテンの花の逸話の引用から始まっている。コレットは母親シドが亡くなってから15年後、シドからきた手紙の束をもとにして『夜明け』の執筆にとり組んだ。『夜明け』の冒頭を飾るシドの手紙は、コレットの2番目の夫アンリがシドに送った招待状の返事である。シドは、招きに応じてパリに行き、娘と積もる話をしたいのは山々である。しかし、4年に一度しか花を咲かせないサボテンの開花がせまっている。花を見逃したくないので招待に応じられなくて残念という内容である。後年この手紙のオリジナルは、コレット80歳の誕生日を記念する特集記事として、*Figaro littéraire*の1953年1月24日号に掲載された。それによると、シドは娘婿の招待を受諾しているのである。したがってサボテンの花云々は、コレットの脚色ということになる。『夜明け』の冒頭を飾るこの逸話を引用するにあたっては、深尾もそれに脚色を加えている。『夜明け』では、手紙はコレットの母シドが娘婿にあてたものであるが、深尾の「サボテンの花」では、作者コレットが娘にあてたものになっている。コレットの賛美者深尾は、「(コレット以外に)こんなすてきな手紙を書く人間があるものか」と綴るためには、手紙がコレットによって書かれることが不可欠だったのだ<sup>(28)</sup>。

ところで深尾は二度目のフランスでの生活をつぎのように記している<sup>(29)</sup>。

私はまた、多忙の中でフリュートの稽古にも通った。今度の先生は、世界のフリュートの神といわれるマルセル・モイーズであった。生意気盛りの若者たちに混じって、私は汗だらけになってフリュートを吹いた。充実したあの昼と夜、しかもあの二年間の私の生活はおよそバガボンドも顔負けのていであったといわねばならなかった。アヴァンチュール、またアヴァンチュールのあけくれ、危険なサン・ドニあたりの横丁にも出没、蝸牛をニダースも食べたり、そのひまに盛んに短編を書いて日本へ送った。新青年あたりに載ったのがそれである。

こうして送られた短編は、その後『深尾須磨子選集《創作編》』に再録された。そのなかのひとつが「さぼてんの花」になったわけである。それはモンマルトルに住む音楽家の家に通ってオーボエのレッスンを受けている、年の頃は40歳ほどの異国の女性が、そこにやってきた、同じくオーボエを習う22歳のフランス人男性と知り合ってアヴァンチュールを経験するというものである。主人公はある晩、表は普通のカフェと変わらない店構えの、地下にある個室に連れていかれた。それは鍵のかかる部屋だったと書かれていて、当時のある種のカフェ・レストランが喚起する風俗的なイメージも書きこまれている。二度目の渡仏の頃の深尾は43歳で、フルートの個人レッスンを受けていたことを思うと、ここに登場する女性は作者の分身であろう。短編全体の構成としては、はじめにサボテンの花の逸話を登場させ、物語の最後で、40歳で芽生えた恋を、4年に一度しか開花しないサボテンになぞらえるという筋立てになっている。

## 8. 深尾のその後の渡欧とコレット

ヨーロッパが第二次世界大戦に突入する半年前の1939年3月、深尾は日独伊親善協会の使節として三度目の渡欧を敢行した。当時の日本はすでに戦時態勢下にあり、一般人の海外渡航は禁じら

れていたため、深尾は師の与謝野晶子に依頼して、外務省勤務だった晶子の二男秀のはからいで使節としての渡航が可能になったのである。しかし、海外に出たいがために、時期も手段も選ばずに出国したこの10か月にわたる旅は、深尾のその後の人生に暗い影を落とすことになる。往復の船旅にひと月半を費やしたほかは、イタリアからドイツへ、フランス経由で再びイタリアへという旅程のなかで、ドイツで20日、フランスで33日、そして6か月と20日をイタリアで過ごしている。フランス滞在は1939年6月29日から7月31日までである。このひと月余りのフランス滞在中について、深尾はつぎのように書いている<sup>(30)</sup>。

今から十余年前、三たびパリを訪れた私は、久々で彼女にも会いたいと思ったのだけれど、ちょうど盛夏の候で、パリ中が田舎へ出払っており、コレットも勿論不在、とにかくするうちにとうとう訪問の機会も失ってしまった。その頃、パリ人の中では、コレットがまた恋愛をしているというような噂が高く、私も半信半疑の中にフランスを去ったのだけれど、その後、たしかかな筋からコレットの結婚を聞かされ、また彼女がゴンクールに祭られ、老いてますます壮んな動静だと知らされて、私は衷心の祝福といのりをささげたい気もちである。

ところで深尾が三度目の渡欧でフランスに滞在していた1939年の7月、コレットの動静はどうだったのか。伝記によれば7月前半は、ブルターニュにある町カマレ＝スル＝メールに近い海辺のホテルで、後半はノルマンディーの保養地ディエップのホテルでヴァカンスを過ごしていた。上述のようにコレット夫妻はすでに4年前に正式に結婚し、66歳になっていたコレットは、持病である足腰のリウマチ性関節炎に苦しんでいた。そしてフランス全土は、第二次世界大戦開始直前の重苦しい雰囲気包まれていた。

深尾の四度目のフランス滞在中は、戦後1957年10月末からの1年間である。コレットはすでに1954年に他界していた。深尾は11月にパリに着くとすぐ、ペール・ラシェーズ墓地のコレットの墓に詣でたという。翌1958年6月1日から5日まで、深尾は第4回世界民主婦人大会に参加するためにウィーンに滞在していたが、6月1日、パリのソルボンヌ大学の講堂では、フランス詩人協会による企画の一環として、グドケによる「コレットの永遠の青春」と題する講演があった。しかし深尾は残念ながらこれに出席できなかったと記している<sup>(31)</sup>。深尾は85年の生涯で6回海外に渡航しているが、コレットとの関わりがたどれるのは四度目までである。

## 9. 結びにかえて

モーリス・グドケは1941年12月12日の朝、ゲシュタポによって逮捕され、パリ北方にあるコンピエーニュの収容所に送られた。モーリスが釈放されたのは1942年2月6日で、その間のコレットの苦悩は察するに余りある。モーリスの残した回想録『コレットのかたわらで』*Près de Colette* (p. 205)によれば、ゲシュタポはコレットにモーリスの死をちらつかせながら、友人たちに関する情報をときどき提供することを条件に夫を釈放してもよいと迫ったという。コレットは即座に答えた、ならば私は死を選びます、と。そんなこと、ご主人に相談しなくてよいのですか、と畳みかけられたコレットは、静かに言った、「わたくしたちは死を選びます」。筆者はこの記述に、コレットを美化するためのモーリスの脚色があるとは思えない。ところでこれまで見てきたように、深尾は人道主義者コレットを、事実を曲げてまでも強調しているのであるが、なぜそこまでする必要があったのか。おそらくそれは、彼女が三度目の渡欧中に示した振る舞いに対する後ろめたさによる

のだろう。第二次世界大戦の戦雲たれこめるヨーロッパに日独伊親善協会の使節として赴き、ヒトラーに会うことはかなわなかったものの、ムッソリーニとは20分間の歓談のときを持つことができた。持参した彼の写真にサインをもらい、母の形見の懐剣一振りを捧げるという傾倒ぶりであった<sup>(32)</sup>。当然のことながら、戦後深尾はこうした行動に対する責め苦を引き受けなければならなかった。コレットが苦しい戦中を生きたと、深尾も別の意味で苦しい戦後を生きたのである。

#### 注

- (1) 『文学者の日記 8 長谷川時雨 深尾須磨子』(1999) pp. 360-363.
- (2) 深尾須磨子 (1968) p. 32.
- (3) 逆井尚子 (2002) p. 36.
- (4) 深尾須磨子 (1968) p. 295.
- (5) 深尾須磨子 (1970-A) pp. 360-361.
- (6) 深尾須磨子 (1968) p. 44.
- (7) 逆井尚子 (2002) pp. 39-43.
- (8) コレット作, 深尾須磨子訳『黄昏の薔薇』(1956) あとがき, pp. 193-194.
- (9) CHALON, J. (1998) p. 178.
- (10) 和田博文他 (2002) p. 239.
- (11) 深尾須磨子 (1970-B) あとがき, pp. 439-440.
- (12) コレット作, 深尾須磨子訳『黄昏の薔薇』(1956) あとがき, p. 195.
- (13) 深尾須磨子 (1970-A) p. 69.
- (14) 同上, p. 80.
- (15) PICHOS, C. et BRUNET, A. (1999) pp. 382-383.
- (16) コレット作, 深尾須磨子訳『黄昏の薔薇』(1956) あとがき, p. 197.
- (17) 逆井尚子 (2002) p. 195.
- (18) 深尾須磨子 (1970-A) pp. 72-73.
- (19) 同上, p. 82.
- (20) 同上, pp. 82-83.
- (21) CHALON, J. (1998) p. 247.
- (22) モーリス・グドケはこの他に『老いのやさしさ』*La douceur de vieillir* (1965)を残している。これは自叙伝ともいうべきもので、ここにはグドケがコレット亡きあと、彼らの友人で、夫に急逝された女性と再婚し、男児の父となった喜びも綴られている。
- (23) PICHOS, C. et BRUNET, A. (1999) p. 345.
- (24) 深尾須磨子 (1970-A) p. 10.
- (25) 和田博文他 (2002) p. 246.
- (26) VIRMAUX, A. et O. (2004) p. 498, p. 513.
- (27) 深尾須磨子 (1970-B) pp. 301-302.
- (28) 同上, p. 62.
- (29) 深尾須磨子他 (1952)「絶対的な業」, p. 15.
- (30) コレット作, 深尾須磨子訳『黄昏の薔薇』(1956) あとがき, p. 192.
- (31) 深尾須磨子 (1970-A) pp. 237-238.
- (32) 『文学者の日記 8 長谷川時雨 深尾須磨子』(1999) p. 109.

#### 参考文献

- CHALON, J. (1998): *Colette, l'éternelle apprentie*, Flammarion, Paris  
 CHAUVIÈRE, C. (1931): *Colette*, Firmin-Didot, Paris  
 COLETTE, S.-G. (2003): *Lettres à sa fille (1916-1953)*, Gallimard, Paris  
 GOUDEKET, M. (1955): *Près de Colette*, Flammarion, Paris



GOUDEKET, M. (1965): *La douceur de vieillir*, Flammarion, Paris  
PICHOS, C. et BRUNET, A. (1999): *Colette*, Ed. de Fallois, Paris  
VIRMAUX, A. et O. (2004): *Colette et le cinéma*, Fayard, Paris  
深尾須磨子他 (1952): 『現代詩の実験』, 宝文館  
コレット作, 深尾須磨子訳 (1956): 『黄昏の薔薇』 角川文庫版  
深尾須磨子 (1968): 『与謝野晶子 — 才華不滅 —』 人物往来社  
深尾須磨子 (1970-A): 『深尾須磨子選集《随想編》』 新樹社  
深尾須磨子 (1970-B): 『深尾須磨子選集《創作編》』 新樹社  
深尾須磨子 (1988): 『マダム・X の春 深尾須磨子作品抄』 小沢書店  
逆井尚子 (2002): 『深尾須磨子 女の近代をうたう』 ドメス出版  
武田隆子 (1986): 『深尾須磨子の世界』 宝文館  
和田博文他 (2002): 『言語都市・パリ 1862-1945』 藤原書店  
日本近代文学館資料叢書 [第 I 期] (1999) 『文学者の日記 8 長谷川時雨 深尾須磨子』 日本近代文学館